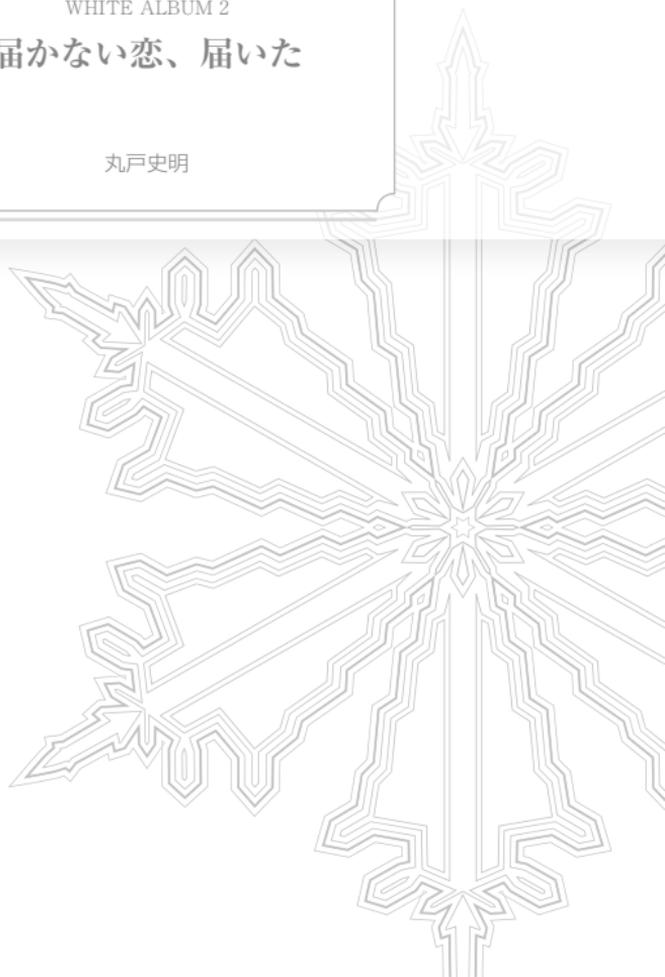


WHITE ALBUM 2

届かない恋、届いた

丸戸史明



届かない恋、届いた

著者 丸戸史明

注意

アニメから入った皆さんへ

このショートノベルは、六話を見た後に読んでいただけると幸いです。

ゲームをプレイ済みの皆さんへ

このショートノベルの内容は、あなた方がだいぶ前に通過した場所です。

かなり今さらな部分もあるかと思いますが、とりあえずさらっと流してください。

筆者

もくじ

第一章

春希

.....

8

第二章

かずさ

.....

18

第三章

雪菜

.....

26

あとがき

.....

34

「実行委員さん……の、お手伝いさん？」

「小木曾……？」

「もしかして……あなたが、ギターの人……？」

WHITE ALBUM……

それは、学園祭まで一月を切った夕暮れの日、第一音楽室と第二音楽室と屋上で繋がった、誰かにとっては偶然の、誰かにとっては必然の、誰かにとっては奇跡の旋律。

初めての、^レ彼がギターを弾き、彼女がピアノで繋ぎ、そして彼女が歌った^レ三人のた
めだけの曲。

そして……

「……何、これ？」

「あゝ、いや、その……」

「新曲。三曲目。ラストナンバー」

「え……」

それから一月近く経った金曜日。

一人がふたりになり、ふたりが三人になって、いよいよ学園祭ライブを翌日に控えたその時に……

「北原が詞を書いて、あたしが曲をつけて、小木曾が歌う、三人のためだけの歌、だ」
もうひとつの、三人のためだけの曲が、ここに完成した。

第一章 春希

「別にいいじゃん。セカンドギターがいたってさ」

「いや、だから出ないって俺は」

学園祭から半年も前の五月上旬。

放課後の第一音楽室には五人の男子生徒が集い、激しい議論を繰り広げていた。

「大丈夫だって春希。今からでも十分間に合うって」

「気休めはやめろって武也。自分の実力は自分が一番よくわかってる」

「そりゃ確かに、お前の腕は箸にも棒にもかからないよ？ これから半年で劇的に成長する見込みもないよ？ けどさ、学園祭ってたかがお祭りだろ？」

「弾かない、もう絶対に弾かない」

いや、その表現は少し正確ではなく、たった今議論しているのはその中でも二人……飯塚武也と、北原春希だけだった。

他の三人は、二人の言い合いを遠巻きに眺めながら、手に持った楽器を弾いたり、携帯

をいじつたりと、割とどうでもいい態度でまったりしていた。

それもそのはずで、今話し合われているのは『ボーカル選出と勧誘について』という深刻な議題のついでに提出された、割とどうでもいい相談事だったから。

『補欠ギター・北原春希の正式メンバー昇格について』

「ならエアギターとか……」

「武也、お前、俺に大道芸やれって言うのかよ?」

結成されてたつた一月の即席バンド『軽音楽同好会』は、半年後の学園祭でカッコいいところを見せつけて、学園生活最後のモチ期到来を目指そうぜという、とても軽くて薄くてライトな動機で結成された、超チャライ男たちの集まりだった。

ただ、元からそういう『楽器やったりや女にモテンだろ』みたいなご都合主義の思想に染まったメンバーたちは、その教義に殉じたがゆえ、曲がりなりにもほぼ全員がバンド経験者という陣容で。

で、そのほぼ全員から外れた唯一人、友達に誘われてなんとなく加入した春希のギターの腕前は、半年後にモノになっているかと聞かれれば、誰もが首を傾げざるを得ない状態

だった訳で。

「でもさ、せっかくの学園祭だぜ？ 春希だって、そろそろ彼女の一人や二人欲しいだろ？」

「武也じゃないんだから二人もいるかよ。じゃなくて、とにかく俺は出ない」

「春希……」

そんな周囲の空気を誰よりも感じ取っていた春希は、多分、それでも純粹な友情も込みで誘ってくれている武也の申し出を徹底的に突っぱねて……

「けど、たった一つ、やりたいことがあるんだ。聞いてくれるか？」

「なんだよ？」

即座に、その代替案とばかりに、一つの、そして本命の希望を申し出た。

なぜなら、春希は知っていたから。

本当にやりたいことを通すためには、まずは相手に負い目を感じさせ、譲歩を引き出す空気を形成しておくのが効果的だということ。

「おう、それいいんじゃない？」

「そうだよな、俺たちのカラーみたいなのも出せるし」

「やっぱ学園祭は皆で盛り上がるもんだしな」

そして、そんな春希の姑息な……いや巧妙な作戦が功を奏したのか……

さつきまで、消極的に武也を支持する『ふりをしていた』他のメンバーたちは、そのちよつと控えめな代替案を、今度は積極的に支持し、あからさまにほつとした表情を見せる。

なぜなら彼らにとつて、春希は決して邪魔な存在じゃなかったから。

バンドメンバーとしての実力はアレだったけれど、『学園祭の裏実行委員長』とまことしやかに囁かれるその行動力と、これまで築き上げてきた政治力は、今年結成されたばかりの、なんの後ろ盾もない同好会にとつてはどうしても必要だったから。

「じゃあ、みんな異存はないな？」

「春希こそ、そんなんでいいのか？」

「そんなん、じゃないよ、武也」

そんな中、ただ一人、少しだけ本当に残念そうな表情の武也に向けて春希は、こちらも少しだけ、本当に満足そうな表情で応える。

「俺の、三年間の集大成だ」

※ ※ ※

「うん……」

そしてその夜……

自分の部屋で勉強の息抜きとばかりに、新しいノートを広げ、一行目に『タイトル』と五文字書いただけで、春希は、いきなり鉛筆を放り投げて天を仰いだ。

「作詞とか……何イタいこと言っちゃってんだよ俺……」

『学園祭発表用の、オリジナルナンバーの作詞』

学園祭ライブに向けて春希が希望したのは、そんな裏方の、そしてある意味重要なポジションだった。

現国の成績から考えて、このパートが一番自分向きと判断しての堅実な選択だと、あの時は思っていたのだけ……

そもそもその、学業成績を判断基準にすることこそが、春希がまるでバンド活動なんかには向いていない証左でもあったりした。

「設問さえあればなあ……」

そう、これがテスト問題なら。

『この時の主人公の心情を述べよ』とさえ答案用紙に書かれていれば、聞かれもしないのに主人公の態度や言動における問題点なんかをいちいち詳細に辛辣に説教くさく、解答用紙をはみ出るくらい書き連ねることができる春希だったけれど……

けれど思い起こせば、それもつまり、例文あつてのことだった。

そんなわけで、その『例文』をひねり出すのが極端に苦手だったと今になって思い知らされた春希は、それでも一時間かけて、まずは自分の知っている最近のメジャーな曲の詞をコピーして適当に繋いでみて……奇声を上げ一秒で破り捨てた。

それから『さすがにパクりはマズいな』と反省し、今度こそ真面目に自分の言葉を使ってみようと奮起して……一時間、手を止めた。

何しろ、自分の経験から浮かぶ言葉が、ギターの旋律で、ドラムのリズムで語られるイメージが湧かない。

これまでの春希の日常は、ロックとは徹底的に相容れない存在だった。

社会に対する不満なんか持っていない。

家族に対する鬱屈した思いは言葉にできない。

だったら恋愛……自分の、灰色の学園生活にそんなものは存在しない。

「……明日にしよう」

結局、三時間無駄にして、そろそろ午前二時を指し示す時計を目にしたとき、春希は目の前の作詞ノートを引き出しにしまい、棚から参考書を取り出した。

※ ※ ※

そして時は過ぎ八月。

夏休みも中盤に差し掛かった日の夕刻。

全速力でマンションの階段を駆け上がり部屋に帰ってきた春希は、制服を着替えることも、滝のように流れ出る汗を拭くことも後回しで、机の引き出しをまさぐった。

「っ……あった!」

そして、整然と詰められていた中身をめちゃくちゃに荒らした末に、その一番奥に眠っていた一冊のノートを見つけると、勝利の雄叫びとともに誇らしく頭上に掲げる。

……それこそが、あの作詞ノートとの、三か月ぶりの再会の瞬間だった。

最初は、叙情的な言葉を紡ぎ出すのが恥ずかしく。

さらには、なかなか上達しないギターの腕につられて、バンドへの情熱を失いかげ。ついでに、単なる手伝いのはずなのに、どんどん忙しくなる学園祭実行委員の雑務が心の余裕を奪い。

そんなこんなで、この三か月の間、学園祭向けのオリジナルナンバーの作詞は、結局のところ何も進んでいなかった。

けれど今日は、そのモチベーションをふたたび取り戻す出来事があった。初めて、一曲を通して弾けた。

自分が一番好きだった曲が、自分が唯一弾ける曲になった。

そんな興奮が、高揚感が、春希に、自分の感情を文字に起こす気持ちを蘇らせた。今の流行なんかどうでもいい。古くさくてもいい。

ロックじゃなくてもいい。歌謡曲しか知らないんだからしょうがない。そして恋愛なんか……してなかったって、今なら思い描くことはできる。

「孤独な……」

思い描くべきは、あくまで想像の中の、春希の理想の少女。

例えば、席が隣同士という、使い古された距離感。

誰とも触れあわない孤高な少女という、聞き手に興味を持たせるための舞台装置。

けれど、他の誰でもない自分だけには優しい言葉を掛けてくれるという、作り手にも受け手にも都合のいい設定。

「気になっていた……」

……などと自分を誤魔化すしかないほどに、紡ぎ出す言葉の端々から、特定の人物が溢れ出していた。

思い描いてしまっているのは、どう見ても実在の、春希のお隣の少女。

席が隣同士で、誰とも触れあわず。

……けれど今日、自分のギターの師匠になってくれた、長い黒髪の、同級生。

「……うわ」

そして、なんとか一番が書き上がり……

さすがに、あまりにも創作っぽくなくなってしまったその歌詞を見て、春希は冷や汗混じりに苦笑を浮かべたが、それでも納得したように頷くと、今度は赤ペンを取り出し、書き上げた詞に修正を入れていく。

出来たものを一定の法則に従って直すことに関しては、もはや春希の得意分野だ。

まず、内容はできるだけほかす。

歌っている人間と、想い人の性別は不明にする。

一人称は出さない。二人称すら『あなた』に抑える。

だからこの詞の主人公は北原春希じゃない。

だから『あなた』は、春希の隣の席で、ギターを覚えてくれた冬馬かずさじゃない。

これはただの、どこにでもいる『決して届かないひとに憧れる、平凡な人間の物語』。

「……まあ、これくらいなら、大丈夫だろ」

真つ赤に埋め尽くされ、もはや自分以外は何が書いてあるかわからないノートを見て、春希は少し照れくさそうに、けれどとても満足そうに頷いた。

ちよつとばかり、モデルにされた少女の迷惑そうな表情がちらついて、いたたまれない気持ちになりかけたけれど、それも一瞬のこと。

「じゃ、二番いってみようか」

とつづく日が暮れていたことにも気づかないまま、春希は勢いよくノートをめくった。

第二章 かずさ

「……と、そうだ、忘れてた。これ、読んでみてくれ」

「で、今度はどんな冗談だ？」

「できれば……あいつの本当の夢を叶えてやって欲しい」

「え……」

そんなやり取りとともに、軽音楽同好会のかりそめの部長、飯塚武也から、彼にしては珍しい、真剣な表情で託された一冊のノート。

「……ぷっ」

……を初めて開いた彼女の第一声、というか第一息がこれだった。

「これをあいつが考えたって？　なんて言うか、なあ？　あは、あはは……」

そして、続いての第二声がこの、嘲笑とも失笑とも取れる、ある意味清々しいまでの微笑だった。

冬馬かずさ――

峰城大学付属学園三年E組所属。

女子にしては長身で、自慢の……ではなく、本人にしてみれば勝手に生えてる程度にしか思っていない長くまっすぐな黒髪を持つ少女。

……ついでに、誰とも触れあわない孤高の性格で、隣の席にお節介でギターの下手なくラスメイトを持つ、実は根の優しい少女。

一一月の中旬。

いよいよ、学園祭ライブを一週間後に控えた晩秋の夜。

自宅の地下にある音楽スタジオで、かずさはピアノの譜面台にそのノートを広げ、色んな意味でその内容を満喫していた。

『あいつにも、こんな痛々しい妄想にふける感性ってやつがあつたんだなあ』

ついさつき、友達とのちょっとした言い合いでもやもやしていた気持ちだが、なんとなく晴れていく気がしていた。

何しろ、こんな痛々しいポエムを書くような勘違い男を巡って女二人が微妙な雰囲気

なるなんて、馬鹿馬鹿しいにも程があると思えてきたから。

※ ※ ※

かずさにとつて、この詞を作った張本人、北原春希は、目の前をいつもちらついている鬱陶しいクラスメイトで、目の上のたんこぶな世話焼きで、目が離せない馬鹿で、そして目をかけている弟子みたいな存在だった。

クラスメイトや教師からは、自分とは比べ物にならないくらい信用され、頼られ、そして便利に使われ倒されていて、賽銭なしで願いを叶えてくれそうな神様みたいに見られていて。

なのにかずさにしてみれば、単に鬱陶しくて、変に頼ってきて、そして次から次へと厄介ごとを持ち込んでくる、どうしようもない疫病神にしか見えなくて。

だから、そんな彼が恥ずかしい言葉を綴ったこの黒歴史ノートは、今までの鬱憤を晴らす千載一遇のチャンスだった。

あのくそ真面目な委員長が、裏ではこんな勘違いポエマーだったというこの事実をどう利用してやろうかと、かずさは思わず緩んでしまう頬を隠すこともせず、軽く鍵盤を弾く。

『孤独な、ふりを、してるの』

右手で主旋律を、左手で伴奏を。

未だにどこにも用意されていない、その詞に合った曲を、即興で弾く。何しろノートには、詞と、作曲者の名前しか書かれていなかった。

譜面も、作曲者のクレジットも、なにもなかった。だから今のままでは、ライブに使える訳がなかった。

『何故だろう、気になっていた』

ノートの隣に立てかけた五線紙に、鉛筆で音符を書き加えていく。

左手は相変わらず鍵盤の上を彷徨い、主旋律を飾る音を探している。

さつきまで、散々笑い飛ばしたその詞に、今は真剣に向き合っている。というか元々、詞そのものの出来に文句なんかなかった。

ちよつと不器用だけど、ちよつと真剣過ぎるけど。

だからこそ、まっすぐな思いがダイレクトに伝わってきた。

本音を言えば、少し、グッときていた。

……ただ、一緒にそれを作った人間の顔が浮かんでしまうから笑えるだけで。

『どうすれば、この心は……』

「……あ」

けれど、Bメモに入ったところで、思わずかすさは手を止めた。

その視線は、部屋に置かれたデジタル表示の時計に注がれている。

「何やってんだ、あたし……」

その、真夜中過ぎた時刻ではなく、学園祭まで一週間で切った日付に。

あと一週間で、へたくそなギターをなんとか形にして、二曲目の『SOUND OF DESTINY』を合わせて、打ち込みを調整して……

結果、学園祭ステージを成功に導く。

一緒にステージに上がる三人のうち、ステージ経験があるのは自分だけの状況で、それを全て為し遂げる。

その負担は、最近では本職のピアノですらお遊び程度にしか触っていなかったかずさにとって、明らかにオーバーワークとも言える量だった。

冷静に考えれば、今はこんな寄り道をしている場合じゃない。

まずは、今でさえ危ないステージを無難に成功させることこそが最優先に決まっている。けれど……

『今からじゃ間に合わないか？ いくら冬馬でも、こればかりは無茶なのか？』

「……余裕に決まってるだろ」

結局かずさは、もう一度鍵盤に自分の指を戻す。

ただの想像の中の安っぽい挑発に乗って、思いつき見栄を張りながら。

「あいつらを救えるのは、あたしだけだ……」

昔の、中学生までのかずさは、信じていた。

相手が音楽なら、自分が本気さえ出せば、出来ないことなんか何もないと。

一度は、実の母親に見捨てられ、諦められた才能だったけれど。

それでも、あと一曲作るくらいなら。

学園祭のステージで成功する程度なら。

そして、あの馬鹿をあつと言わせるレベルなら……今の自分でも、余裕だと。

『どうすれば、この心は、鏡に映るの』

もう一度、ピアノの旋律が部屋に響く。

力いっぱい、このまっすぐな詞に感情移入して。

作った奴のことを、極力頭から追い払って、かずさは作る。

孤独なふりをした、誰かを思う曲を。

なかなか心を開いてくれない、つつけんどんで、ひねくれている、そして、寂しがり屋な誰かに触れようとする曲を。

それは、幸せな勘違い。

そして、致命的な思い違い。

かずさは、最後の最後の最後まで、気づかなかった。

孤独なふりをした、誰かの正体に。

なかなか心を開いてくれない、寂しがり屋な誰かの名前に。

そして、そんな誰かに向けられた、あからさまに真っ直ぐな気持ちにさえも。

けれどそれは、その時のかずさにとっては仕方のないことで……

なぜならその瞬間、冬馬かずさは、その詞に出てくる登場人物とはまるで別人だった。孤独ではなかった。寂しくなかった。優しかった。素直だった。

……誰かに、心を開いていた。

第三章 雪菜

「……何、これ？」

「あゝ、いや、その……」

「新曲。三曲目。ラストナンバー」

「え……」

「北原が詞を書いて、あたしが曲をつけて、小木曾が歌う、三人のためだけの歌、だ」

そんなやり取りとともに、軽音楽同好会の実質的な部長、冬馬かずさから、彼女にしては珍しい、力強い笑顔で託された一束の楽譜。

「三人の……歌？」

……を初めて読んだ彼女の第一声がこれだった。

小木曾雪菜——

峰城大学付属学園三年A組所属。

男子の理想を完璧にバランスよく配置した、自慢の……というか、本人にしてみればありがた迷惑かもしれない、可愛らしい容姿と柔らかい物腰の少女。

……ついでに立ち振る舞いも『これぞ学園のアイドル』と誰もが認めているのに、学園一の堅物優等生にばかりかまけている、ちよびつとだけ悪戯っぽい本質を持つ女の子。

一月の下旬。

とうとう始まった学園祭の初日。

そして、メインイベントのライブを明日に控えた金曜の午後三時。

クラスの出し物である、大正浪漫喫茶の看板娘として接客に駆り出されていた雪菜は、そこに突如として現れた春希に拉致され、こうして女給服姿のまま冬馬家の地下スタジオに連れ込まれるという波瀾万丈の一日を過ごしていた。

そしてとどめとばかりに、今、この混乱を締めくくる最大のサプライズが、この部屋の主から告げられたところだった。

「届かない、恋……」

昨日まで、雪菜たち軽音楽同好会の面々には、次から次へとトラブルが舞い込んでいた。

二曲目『SOUND OF DESTINY』の目玉であるギターソロは未完成。

メンバーの精神的支柱だったかずさの、突然の体調不良による離脱。

かずさと春希を失い、たった一人でリハーサルに臨んだ雪菜の、こちらも突然声が出なくなるという大失態。

誰も彼もが問題を抱え、もはやライブの成功どころか、当日ステージに立つことすら風前の灯火かと思われていた、ほんの数時間前。

なのに今の、この状況は……

「あ、いや、あのさ……もともと俺が同好会に参加したのって、一曲だけでも書かせてもらうためだったと言うか」

春希はカッコいい男の子を演じ切り、かずさは完全に復調し、そして雪菜は仲間たちとの再会を果たし。

そんな起死回生の大逆転に大興奮する場面のはずなのに。

いや、春希が奪ってくれたほんの少し前までは、確かにそうだったのに。

『孤独な、ふりを、してるの』

『何故だろう、気になっていた』

「ギターは武也がいたから、自分がステージに上がるなんて考えてなかったし」

春希の照れた声が、遠くから聞こえてくる。

本当はすぐ近く、耳元で喋っているはずなのに、その内容はほとんど頭に入っていない。今は、雪菜だけが二人の高いテンションから取り残されていた。

『気づけば、いつの間にか』

『誰より、惹かれていた』

「けど、ま、三年間の集大成というか、たった一つの馬鹿というか……」

音符の意味はもとからわからなかったけれど、そもそも今は目に入らなかった。見えていたのは、その下。

一つ一つの音符に、ルビのように振られていた、『北原が書いた』という歌詞の方。

『どうすれば、この心は、鏡に映るの』

雪菜の脳裏に、その情景が一つ一つ鮮明に浮かんでくる。

浮かんでこないはずがなかった。

だってこの詞は、この歌は……

優等生の少年が、窓際の不良少女に、不器用な恋心を抱き。

その伝わらない、伝えるのが恥ずかしい、でも伝わって欲しい気持ちをそのまま文字にしただけの、あまりにも見え見えな告白台詞だったから。

優等生の少年を、窓際の不良少女を、たった一月しか知らない自分にすら、そこまで伝わってしまうほどの強い気持ちだったから。

『届かない恋をしていても、映し出す日が来るかな』

だから雪菜は、この作詞者の脳裏に浮かんでいないものまでわかってしまう。

優等生の少年の視線の先に、一月前に知り合ったばかりの、別のクラスの少女の姿が映っていないことに。

「あ、あのっ、これ！」

「なに？ どこが変だった？ できれば駄目出ししてくれると助かるんだけど」
 「そうじゃなくて……これ」

きよとんとした少年の表情を見た後、ピアノの前の少女をじっと見つめる。

と、その少女……かずさは、やれやれとばかりに肩をすくめ、ため息混じりに雪菜に笑いかける。

その瞳の奥に、いつもは見せない、柔らかで、優しく、愛情に満ちた光をたたえて。それは余裕でも、謝意でも、ましてや悪意でもなく。

だから雪菜は、もうひとつのことまで、わかってしまった。

この詞は、この歌は、まだ進行中なのだ。

主人公の想いは宙に浮いたまま、未だにヒロインに届いていないのだ。

※ ※ ※

「そろそろ行けそうか？ 小木曾」

「う、うん……」

かずさの呼びかけに、雪菜は、とうとうその時が来てしまったことを悟る。

各々の個人練習が終わり、三人で合わせる瞬間……

春希がかずさを想うこの歌を、自分が歌わなくてはならない瞬間が。

「北原も、行けるか？」

「ああ……」

この瞬間になっても、雪菜には自信がなかった。

この詞を、この歌を、いつものヒトカラのように、心からの笑顔で歌いきれる自信なんか、持てる訳がなかった。

けれどこれは、春希の夢。

かずさが叶えようと、体を壊してまで頑張った、三年間で一番大きな夢。

かずさの想いにどれほどの強さがあるのか、全部は読み切れなかったけれど。

それでも彼女は、春希を後押しする自分の行動を、雪菜に隠さなかった。

それだけでも、もう、敵わないほどの強敵だった。

「じゃ、行くぞ……二人とも」

「ああ」

「……うんっ」

だったら雪菜は、かずさと同じく、春希を後押しするしかなかった。

最強のライバルがここまで頑張っているのに、自分だけが降りるわけにはいかなかった。

ギターが鳴る、ピアノが続く……

瞬間、雪菜の目に、耳に、あの日の情景が浮かび上がる。

屋上の夕暮れと、少しだけ退屈していた自分と。

そんな自分を楽しい時間に誘ってくれた、あの『WHITE ALBUM』の旋律が。

〃ああ、そっか……これって、あのときの続きなんだ……〃

〃だったら今は、恩返しをしよう〃

〃あのとき、わたしを導ってくれたギターとピアノに〃

〃自分が出せる限りの声を、載せていこう〃

あとがき

どうも、丸戸です。

このたびは、WHITE ALBUM オンラインイベント『Last stage 3』にお越しいただきありがとうございます……というのを自分が言っているのかどうかわかりませんが、とにかくこのミニノベルを手にとっていただきありがとうございました。

ええ、まぎれもないミニノベルです。

前回の『Last stage 2』で配布した量のものを期待していた方におきましては大変申し訳なく思いますが、ちょっとマジであるのと今の自分の状況の違いっぷりが笑えるレベルにあります、その辺りを察していただければ幸いです。

それで、ほんの数分もかからず中をお読みいただいた方は、すでにお気づきかもしれませんが、今回のお話はアニメ版『WHITE ALBUM 2』の脚本に準拠したお話になっています。

なので、もしかしたら原作のゲーム版と設定的に乖離している部分があるかもしれませんが、そのことに關しては気にしないでください。僕も気にしないことにします。

(今さらあの五メガのテキストの整合性全部チェックするのは不可能です)

何しろこのノベルは、一応、アニメ放映中に発表するということもあり、アニメから入った方でも意味不明にならないものを用意しようとして……実はイベント開催日の実放映回数(五話)と想定放映回数(六話)が一週間ずれるという失態を……ごめんなさいアニメから入った皆さんはこの本読むのあと一週間ちよつと待つてください。

というわけで、何度も蒸し返してすいませんが、アニメ放映中です。

今回、アニメの脚本という初めてのお仕事をいただいたとき、自分の中では『原作をそのままなぞるのではなく、リメイクしていく方向で作っていかう』という気持ちで固まっていた(いやクライアントさんがどう思ってたかは知りませんよ?)。

アニメの文法とか尺とか、いろいろと違う要素に合わせる必要はあるけれど、それよりもまず、実際にこの作品が世に出てから、自分の中で振り返ったり、周囲の意見を聞いたりして『やっぱりこうした方がよかつたかもな』と感じたところを、これ幸いとばかりにちよこちよこ弄っています。

普通、こういう機会ってなかなか恵まれないものですから、今回は千載一遇のチャンスということので好き勝手……いえ、楽しくやらせていただいています。

そんなこんなで、原作とアニメ、どっちがよかったというのは議論としてあっても、どっちが正しいかというのはないつもりです。なので皆さんも、新しい『WHITE ALBUM 2 ANIMATION CHAPTER (A C)』を新しい気持ちで楽しんでいただければ幸いです。

ちなみにこういうこと書くと『あとがきでいちいち言い訳しやがって』と思われる方もいるかと思いますが、そうですその通りです。

僕のこの卑屈さに免じて許していただければ幸いです。

二〇一三年 秋

丸戸 史明

届かない恋、届いた

2013年11月15日配信

著者 丸戸史明

株式会社アクアプラス ©AQUAPLUS

本書は著作権上の保護を受けています
本書の一部あるいは全部について、株式会社アクアプラスの許諾を得ずに、無断で複写(コピー)、複製(転載)することは、コンピュータネットワーク等も含め、いかなる手段や形態を問わず禁じられています。

